

Title	lui/yによる代名詞化について(I) : 動詞構文を中心に
Author(s)	林, 博司
Citation	大阪外国語大学論集. 6 p.1-p.24
Issue Date	1991-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79547
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

lui/y による代名詞化について(I)

——動詞構文を中心に——

林 博 司

Pronominalisation par lui et y (I)

—— dans la construction verbale ——

Hiroshi HAYASHI

En français, pour pronominaliser le syntagme [à NP], on a deux pronoms, lui et y. Et on trouve, dans beaucoup de manuels de grammaire pour les débutants, une description comme suit : sa distribution dépend du trait [\pm HUMAN] de ce NP, soit,

① N [+HUMAN] est pronominalisé par lui.

② N [-HUMAN] est pronominalisé par y.

Mais on trouve beaucoup de phrases où N [+HUMAN] est pronominalisé par y et N [-HUMAN] par lui. La présente étude a pour but de mettre au clair le principe de la distribution des deux pronoms. Après avoir examiné et critiqué quelques études précédentes, j'ai montré que la thématique et l' "affectivité" (le degré de l'influence que ce NP subit des actions-concrètes ou abstraites-exprimées par les verbes) de ce NP sont les facteurs très importantes. Voici le principe que j'ai proposé :

Groupe A (les actions concrètes)

l' "affectivité" : haute...lui

basse...y

Groupe B (les actions abstraites)

l' "affectivité" : haute...lui

basse — thématique : haute...lui

basse...y

Groupe C (les états abstraits)

la thématité : haute…lui

basse…y

Groupe D (les états concrets)

toujours y

Puis en examinant les exemples tirées d'un roman de Jules Verne, j'ai constaté le pouvoir d'explication de ce principe.

0. はじめに

フランス語には à NP を受ける⁽¹⁾代名詞に y と lui (または leur、以下 lui で代表させる) の二つがあり、それらの使い分けについては、大抵の初級文法の教科書に、次に様に記されている。

①物を表す名詞 (以下 N [-HUMAN]) は y で受ける。

②人を表す名詞 (以下 N [+HUMAN]) は lui で受ける。

しかし、よく知られているように、この基準に合わない例は沢山ある。次の(1)と(2)は N [-HUMAN] が lui で受けられており、(3)と(4)は N [+HUMAN] が y で受けられている。なお、例文の出典は以下の通りである。A₁: 朝倉 (1977)、A₂: 朝倉 (1981)、B: Barnes (1980)、H: Herslund (1988)、P: Pinchon (1972)、S: Sandfeld (1970)、T: 田辺 (1970)、あとはそのつど示した。また、印のないものは特に出典はない。

(1) Si ce n'est pas l'amour, c'est quelque chose qui lui ressemble. (A₁)

(2) Laisse donc tes chaussettes—tu vas leur faire des trous. (S)

(3) C'est un homme équivoque, ne vous y fiez pas. (T)

(4) Tu y penses toujours, à ton lieutenant? (A₂)

これと同じことが形容詞構文にも観察される。則ち、原則的には N [+HUMAN] は lui で受けられ、N [-HUMAN] は y で受けられるが((5)と(6))、それに合わない例も観察される((7))。

(5) a. Jean est semblable à Marie.

b. Jean lui/*y est semblable.

(6) a. Elle n'est pas fidèle à ses principes.

b. Elle ne *leur/y est pas fidèle.

(7) a. Le bouquin de Jean est supérieur à celui de Paul.

b. Le bouquin de Jean lui/*y est supérieur.

動詞構文の lui/y の使い分けについては多くの研究があるが、どの説も一長一短で定説といえるものはないようである。形容詞構文については、筆者の知るかぎり、ほとんど研究がないのが現状である。本研究では、まず動詞構文について考察し、そこで得られた知見を基に形容詞構文

における lui/y の使い分けの原理を明らかにしたい。というのは、動詞構文における lui/y の交替と形容詞構文における交替は同じ原理によるものと考えるのが妥当であり、動詞構文で提案されている様々な説のうち形容詞構文にも適用されるものがあれば、それは両構文の統一原理に近いものだと考えることができるからである。そして本稿では動詞構文を中心に考察し、形容詞構文については稿を改めて論じる。

ところで、lui/y の問題を考える際に考慮に入れなければならないのは、à lui (則ち、à + 強勢形) と中性代名詞の le である。まず à lui であるが、次の例を見てみよう

- (8) Cette thèse appelle une suite. C'est en pensant à elle que nous nous sommes permis de formuler ces remarques de détail. (P)

ここの à elle の部分は y で置き替えることが可能で (次例)、しかも先行詞の [±HUMAN] には関係ないことは先の(4)の例で明らかである。

- (9) Cette thèse appelle une suite. C'est en y pensant que nous nous sommes permis de formuler ces remarques de détail.

しかし、Pinchon (1972) によれば、(8)と(9)には解釈に違いが見られる。則ち、(8)では elle は une suite を受けているのに対して(9)の y は cette thèse appelle une suite という前の文全体を受ける解釈になる。さらに、à lui には次の様な統語論的制約があることは良く知られている。(例は Delaveau et Kerleroux (1985)による)

- (10) a. Pierre, on pense à lui.
b. *A Pierre, on pense à lui.
c. A Pierre, on y pense.

つまり、前置詞句が転位された構文では à lui は使えない。

次に中性代名詞 le の場合を見てみよう。(12)は不定詞の例、(13)は名詞の例である。

- (12) Viendrez-vous ? — Je ne le pense pas. (P)

- (13) A Paris, quand Cécile était en vacances alors que vous ne l'étiez pas. (P)

(12)は je n'y pense pas としてもよいが、Pinchon (1972) によれば le penser は “avoir pour opinion, croire” の意味になるのに対して、y penser は “réfléchir à, ne pas oublier de, avoir dans l'esprit” の意味になるという。(13)については vous n'y étiez pas との違いがまるで感じられない。

このように lui, à lui, le, y の四つは互いに密接な関係をもっていることがわかるが、これらを区別する要因の一つとして各代名詞の持つ一種の情報量が考えられる。これを図式化すると次のようになるだろう。

(14) 情報量	大 ←	lui	à lui	$\left\{ \begin{array}{l} le \\ y \end{array} \right\}$	→ 小
情報内容		性	性		
		数	数	ϕ	
		格			
		[+pro] ⁽⁹⁾	[+pro]	[+pro]	

即ち、le と y は代名詞というだけで、他の二つと比べて情報量はかなり少ない。このことが上で見た解釈の相違と密接に関連していることは容易に想像できる。もちろんこれら四つの形の使い分けの条件はこのような単純なものではなく、様々な要因が複雑に絡まりあっていると考えられる。以上のことを念頭においた上で、本稿では lui/y の交替に焦点を当て、他の二つは必要に応じて言及するに留めたい。

今、動詞構文を次の様に定式化すると、

(15) NP₁ V NP₂ à NP₃

問題をいくつかのレベルに分けて考えることが可能である。①Vの意味構造、②前置詞及び、前置詞語句が文全体の中に担う役割、③NP₃の性質、④NP₂とNP₃の関係、⑤NP₁とNP₂/NP₃との関係、である。もちろん、これら全てが独立して機能しているわけでは決してなく、絶えず全体の中での各要素という点に視点を置かねばならないのは言うまでもない。また、代名詞化が絡んでいる以上、談話の流れの中で(15)全体を考えることが必要であるが、この点については形容詞構文をもふまえた上で次稿で考えることにする。

1. 動 詞

動詞の中には lui とのみ共起するもの (plaire, préférer, etc.)、y とのみ共起するもの (penser, renoncer, etc.) があり、これらは個々の動詞の語彙的特性と考えられるかもしれない。しかし、次の例に見られるように、多くの動詞は lui と y の両方を取ることができ、しかも両者で意味が異なる場合が多い。

(16) Je lui/y répondrai.

lui の時はたとえば Jean だとか Marie のような人を指す読みになり、y の時は cette lettre のような物を指す読みになる。これは個々の動詞の語彙の意味特性によるもとは考えられず、他の要因によるものと考えるべきである。ただ、これに対する反例と思われるものがある。

(17) a. Ce jouet appartient à Paul.

b. Ce jouet lui appartient.

(18) a. Ce livre est à Paul.

b. Ce livre *lui/*y est.

(17)と(18)で異なるのは appartenir と être という動詞のみであるから、両方の違いは動詞の意味特性に帰されるべきで、しかもこの二つはほぼ同義だから、やはり個々の動詞の語彙的特性と考えなければならない、という訳である。しかしここで次の二点に注意せねばならない。まず第一点は同義性についてである。確かに(17)と(18)は所有関係を表すという点では同じであるが、(18)の所有の意味は動詞の意味というより語用論的な意味である。即ち、(18)の意味表示は概ね(19)のようなもので、所有の意味はいわば派生的に出てくると考えられる。

(19) [ce livre BE AT Paul.]

前置詞の意味構造については次節で扱うが、(19)の意味するところは ce livre が Paul のところにある、ということだけで、それが語用論的に所有の意味に解釈される。これに対して(17)の意味表示には [POSSESSION] という意味要素が含まれ、意味論的に所有の解釈がなされる。従って、次の(20)には所有の意味はなく、(21)とはほぼ同義の意味が語用論的に派生される。

(20) Une mouche est au plafond.

(21) Une mouche se pose au plafond.

(20)の意味構造は(19)と同じく(22)であり、(17a)と同様、適切なコンテキストが与えられれば à NP の代名詞は可能である。

(22) [une mouche BE AT plafond]

(23) Le plafond de cette chambre est sale, et toujours des mouche s'y posent partout!

第二点は文の伝える情報である。一般に x appartenir à y という文は、x について述べる時にも用いられるし、x と y について述べる時にも用いられる。つまり、x、y 間の所有関係について述べる場合で、y は旧情報でありうるし従って代名詞化も可能である。ところが、x être à y の形の文は x の存在する場所を述べる文であり、y がいかに旧情報を担っていても [BE AT y] 全体がいわば一つのセットとして新情報を担っており、従って y だけを取り出して代名詞化することはできないのだと考えられる⁽³⁾。以上(17)、(18)は厳密には同義ではないこと、(18b)の不適合性はべつの要因が絡んでいることを述べた。但し、動詞の意味が lui/y の選択に関係するのはもっと一般的な意味で、後に見るように「被動性」という概念を用いるときに関与してくるし、次節以下で見ると、à NPとの関係に於て「動き」を表すか否かという特徴は重要な役割を演じる。

2. 前置詞及び à NP_i

よく知られているように lui は à + N しか受けれないが、y は à の他に dans, sur など場所を表す前置語句を受けることができる。Pinchon (1972) によれば歴史的には y は avec, chez, auprès de などの前置語句を受けることができていた。

(24) Qui sera avec eux ? ; y serez-vous, vous qui parlez ? (P)

(25) Elle allait quelquefois, la nuit, chez un limonadier de la rue du Four...

Elle y livrait les gazettes. (P)

(26) Ce sont choses qu'il faut avoir auprès de nous, mais non pas les y coller. (P)

これらの前置詞は目的語としてN [+HUMAN] を取っていることに注意する必要がある。つまり、y と [-HUMAN] という特性とは本質的なつながりはなく、N [+HUMAN] を目的語として取る、場所を表す前置詞が歴史的変化の過程で使われなくなった結果 y と N [-HUMAN] とのつながりができたと考えるべきであろう。従って、現代フランス語でも話し言葉では y は N [+HUMAN] を受けることができる。

(27) J'y ai dis. T'as qu'à y téléphoner. (P)

さて、前置詞のàについては昔から多くの研究があり、辞書にも詳しい分類が載っている。分類の一例として林(1957)をみると四十以上の細かい項目があるが、lui/y で代名詞化できるのは locatif の空間用法、directif の空間用法、ablatif、datif のみである。他の用法が何故代名詞化できないのかという問題は、そもそも代名詞とは何か、という大問題につながり本稿の範囲を大きく超えているのでここでは扱わず(但し、形容詞構文を扱う時にこの問題について考える予定である)、代名詞化できるもののみを検討してみる。ここであげた四つの用法の基本的意味を、動詞も含めて図式的に表せば次の様になる。

(28) [BE AT]

(29) [GO TO]

(30) [COME FROM]

(28)は locatif の用法で、あるものが具体的あるいは抽象の場所にあることを表す。多くの場合 à NP は y で受けられるが(17)のように lui で受けるものもある。また dans, sur など、動詞に動きがないものはここに入る。

(31) Il en résulte donc que ce golf est abrité complètement sur tous les côtés, et il est à croire que, même par les plus mauvais vents, la mer y est calme comme un lac.

— Sans doute, reprit le marin, puisque le vent, pour y pénétrer, n'a que cet étroit goulet creusé entre les deux caps... (Verne: L'île mystérieuse)

(32) Tu penses à ton avenir? — Oui, j'y pense toujours.

(31)の最初の y は à ce golf を受けている(二番目の y は dans ce golf を受けているがこれはむしろ次の(29)の例になっている)。(32)は抽象的存在で、[la pensée BE AT l'avenir] のような意味構造を持っていると考えることができる。(29)は datif の中心的用法で、動詞は動きを表すものが多い。普通は lui で受けられるが、具体的な動きを表す場合は datif とは考えられず、(31)の例の後半部分で見られるように y で受けられ、やはり dans, sur も可能である。

(33) a. Je donne ce livre à Marie.

b. Je lui donne ce livre.

(34) a. Ce décor donne un charme fou à la maison.

b. Ce décor lui/*y donne un charme fou. (Leclère(1978))

ここで思い出されるのが、Leclère (1978) の verbe datif または vrai datif という概念である。Leclère は典型的な datif、いわば datif のプロトタイプを次の様に規定した。

(35) N_0 V N_1 à N_2 において、 N_0 [+HUMAN] と N_2 [+HUMAN] との間に N_1 [CONCRETE] のやりとり (échange) がある。

これを(29)式に表すと、 $[N_1 \text{ GO TO } N_2]$ のようになる。ただ、次の例のように「動き」のない場合や、「動き」はあるが lui で代名詞化されていない場合は問題がある。

(36) a. Ce bonhomme ressemble à mon perroquet.

b. Ce bonhomme lui ressemble. (H)

(37) a. Il mettait toute son énergie à cette entreprise.

b. Il y mettait toute son énergie. (B)

どこまで、またはどの点で、プロトタイプから遠ざかれば datif でなくなるのか、明らかではない。最後に(30)であるが、これは ablatif の用法で、専ら lui で受けられる。

(38) a. Paul a volé un jouet à Jean.

b. Paul lui a volé un jouet.

(39) a. Paul a arraché un aveu à Marie.

b. Paul lui a arraché un aveu.

これには次の様な反例と思われるものがある。

(40) Nous sommes enfin arrivés au puits et nous *lui/y avons tiré de l'eau.

(41) Il a obtenu un poulet, mais il a commencé à lui/*y arracher les plumes.

(40)、(41)とも NP_3 は ablatif なのにどうして違いがでるのであろうか。これは、(40)では、インフォーマントは au puits を場所、つまり locatif と解釈したためだと思われる。そしてそれは(40)と(41)では NP_3 の被動性、つまり動詞で表されている動作の影響を受ける度合いの違いを反映した結果であろう。従って、ここでは前置詞の意味構造とは別の種類の要因が関与している。以上のことをまとめれば以下のようになる。

(42) a, 場所 ([AT]) 具体……y (2), (23), (31), (40)

抽象……lui (17)/y (32)

b, 動き ([TO]) 具体……lui (33)/y (31)

抽象……lui (34)/y (37)

c, 動き ([FROM]) 具体……lui (38), (41)

抽象……lui (39)

(1)、(36)は抽象的场所に入れるのがいいかもしれない。いずれにせよ、datif: lui, locatif: y といったような単純なものではない⁽⁴⁾。この節では動詞の意味との関連で捉えられた前置詞の意味

構造では lui/y の交替の条件を明らかにするには不十分であることを見た。

3. NP₃

前置語句の名詞についての研究は多くある。まず、朝倉 (1977) によれば次例の lui/y の対立は名詞の特定／不特定にある。

(43) Dans dix minutes...Belœuf ressemblera ou ne ressemblera pas à un chat.

—S' il doit y ressembler dans dix minutes. il y ressemble déjà. (A1)

(44) Regardez ce chat, il me semble que cet homme lui ressemble. (A1)

これに加えて前節の(36)((46)として再掲)と次の(45)も同種の例と考えることができる。

(45) a. Ce bonhomme ressemble à un perroquet.

b. Ce bonhomme y ressemble. (H)

(46) a. Ce bonhomme ressemble à mon perroquet.

b. Ce bonhomme lui ressemble. (H)

(43), (45)の chat, perroquet は特定の指示対象を持たないのに対して、(44), (46)では ce, mon によって特定の指示対象が想定される。そしてこの指示対象の有無が lui/y の対立に重要な役割を演じていることは容易に想像できる。しかしこれには次の反例がある。

(47) Présenter une personne à quelqu'un, la lui faire connaître en donnant son identité. (H)

(48) Créer quelque chose, lui donner une existence, une forme, le réaliser. (H)

(47)は [−SPECIFIC, +HUMAN], (48)は [−SPECIFIC, −HUMAN] の例である。これらは [±HUMAN] にかかわらず不特定名詞が lui で受けられている。y で受けられる場合も [±HUMAN] とは関係ないことは次の例でわかる。

(49) — On dirait une reine.

— Oui, ce n'est pas une, même si elle y ressmble. (H)

また、総称名詞は [±HUMAN] を問わず lui と y の両方可能である⁽⁵⁾。

(50) Les femmes réalisatrices sont rares. Rares aussi les festivals qu' on leur consacre. (H)

(51) Une conquête facile rend l'amour sans valeur, une conquête difficile lui donne du prix. (H)

(52) un peu de connaissance éloigne de l'homme, beaucoup de connaissance y ramène. (H)

(53) Le fauteuil roulant, on peut y échapper. (H)

このように、名詞の特定／不特定という特性が重要な役割を演じていることは確かであるが、これだけでは不十分であることがわかる。

あとよく似たものに Grevisse (1969), Sandfeld (1970) がある。前者はN [-HUMAN] が lui で受けられるのは当該名詞が “déterminé et individuel” の場合であると述べているし、後者は “il s’agit d’une chose déterminée et individuelle et non d’une catégorie” と述べている。例は各々次の通りである。

(54) J’avais toutes les peines du monde, je l’avoue, à écouter un texte immobile et à lui consacrer mon attention. (Grevisse)

(55) Le rappel constant du malheur public nous force à lui comparer nos malheurs privés. (S)

次に Barnes (1980) に移ろう。Barnes (1980) は +dative: lui, -dative: y とした上で、±dative は直接目的語と間接目的語の “have relation” (次節参照) によって決定されと考えている。そして à NP の NP については次の様な “Distinct Entity Constraint” を立てて lui と y の区別をしている。

(56) Distinct Entity Constraint

lui: unitary entities, a well defined distinct entity, an individual
individual reading
y: activity, act, event NP, infinitive, proposition
content reading

この制約は今まで見てきた特徴の上に、y は不定詞や文全体を受けることができるというよく知られた事実をも含んでいるという点で優れていると思われるが、上で見た反例がそのままあてはまるし、次の様な例を説明することは困難である。

(57) A cette porte, il lui/*y a donné une couche de peinture. (藤村(1989))

(58) Maltravers alla refermer la porte et lui/y donna un tour de clef. (同上)

(57)において y が用いられないのは porte が distinct entity であるから、と言えるが(58)で y が許容されることは説明できない。両者とも porte は十分に distinct entity だと思われるからである。ただ、(56)で面白いのは、lui と y による読みの違いである。第0節の序論の(8), (9), (12)のところで y と à lui, 中性代名詞 le との読み違いを見たが、lui/y にも同じような読みの違いが観察される。

(59) Le portrait est bien fait, mais il faudrait lui/y ajouter quelques touches plus claires. (B)

lui の場合は、修正が必要なのは肖像画の内容(つまり、モデルとの類似性)だが、y の場合は内容に関係なく単に絵の修正が必要だという解釈になる。

(60) Il comptait organiser une entreprise financière et lui/y destinait toutes ses ressources. (B)

lui は enterprise そのものを指すが、y は l'organisation de l'entreprise という行為を指す。(59)は「内容」対「表面」、(60)は「個」対「個を含む行為」の対立であった。次の例は y の方に locatif の意味合いが強く出ている。

(61) Elle étudiait ce visage : de longues années de souffrance lui/y avaient imprimé un air impassible. (B)

(62) C'est une belle peinture, mais il lui/*y faut un cadre à cette peinture. (B)

(63) C'est une belle peinture, mais il lui/y faut quelques touches plus claires. (B)

(62)は意味上 locatif の解釈が無理なので *y だと Barnes は述べている。というのは locatif の解釈が可能な時は y は用いるができるからである。

以上の事実から、場所とか行為といった積極的な解釈が可能な場合は特定名詞でも y で受けれるが、(62)のようにそれができない場合はやはり無理であることがわかる。次の例は不特定名詞なので lui は無理だが y もその名詞を指せないケースである。

(64) Elle rêvait d'une petite maison à la campagne, et ?lui/y consacrait toutes ses économies. (B)

家はまだできていないのだから指示対象はない。従って lui はおかしいし、y も家は指せない。しかし “la construction de cette maison” や “la réalisation de ce rêve” の意味では使える。これは y の持つ語彙的な特性、つまり、(14)で示したように自分自身の情報量が極めて希薄であるという特性によるものと考えられる⁽⁶⁾。y のこの lui に比べて可能な先行詞の幅の広さと場所との強い意味的結び付きという二面性が問題を複雑にしているように思える。さて、Barnes (1980)にはもう一つ興味深い例がある。

(65) Il *lui/y destinait son fils, à cette entreprise. (B)

(66) Ah! cette entreprise! C'était la chose la plus importante de sa vie. Il y mettait toute son énergie, il lui/y destinait son fils. (B)

(65)で lui が使えないのに(66)で使えるのは enterprise に詳しい説明が付き、theme 性が上がり、次節で述べる “have relation” に合致するようになったからだ Barnes は説明している。

“have relation” はともかく、(66)で言えることは cette entreprise の指示対象がより明確になったということで、先の特定性の問題と合わせて考えると、名詞の指示対象の確立度の度合いが高くなると lui が好まれる、という傾向がありそうである。この点に関してはまとめの節で詳しく考察することにする。

4. NP₂とNP₃の関係

これには前節で触れた Barnes (1980)の “have relation” と Herslund (1988)の “prédication

secondaire”がある。Barnes (1980)によれば、NP₃がluiで受けられるのはNP₃が所有者、NP₂が被所有者になる [NP₃ have NP₂] という “have relation” が成立する場合である。そして、NP₃が所有者の地位を持つためには文全体の theme にならねばならず、theme になるためには、前節で触れた Distinct Entity Constraint を満足せねばならない。この考えにはいくつかの疑問がある。まず第一に前節で見た Distinct Entity Constraint の不備である。この制約の不備は theme の不備、そして have relation の不備へとつながっていく。仮にこの制約に不備がないとしても theme の概念に問題がある。Barnes の theme の定義は “an NP which is a center of focus or focus of attention” ということであるが、次の例を見てみよう。

(67) Paul, il lui a donné un livre très intéressant, à Marie.

ここで ce dont on parle としての theme は Paul で、Barnes のいう theme は Marie ということになる (lui で受けられ、[Marie have un livre] が成り立つ)。左方転位、右方転位の問題はさておいて⁽⁷⁾、この lui は果して話者の興味の焦点と言えるだろうか。藤村(1989)は「話者の興味の焦点が必ず所有物より所有者の方にあると主張することはできない」と述べているが、この場合も興味の焦点が旧情報を表す主題であるなら Paul の方が近いし、聞き手に伝えたい情報であるならむしろ被所有物の方が近いであろう、これが二番目の疑問である。第三番目は(41)、(46) (以下に簡略して再掲) についてである。

(41) Il a commencé à lui arracher les plumes. (lui=un poulet)

(46) Ce bonhomme lui ressemble. (lui=mom perroquet)

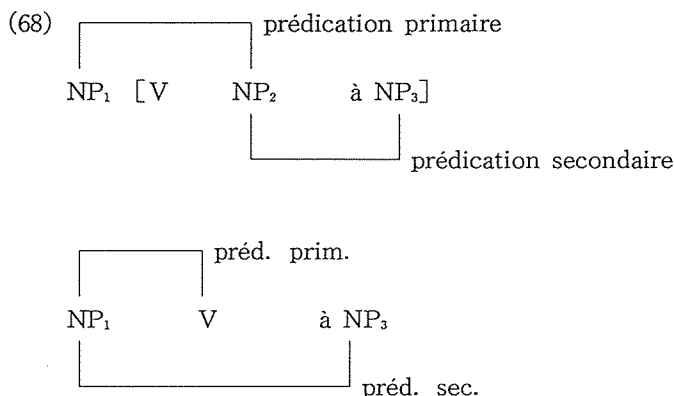
まず(41)はNP₃とNP₂が have relation の関係を持つとは考えにくい。arracher という行為の結果 lui は所有者の地位を失うのだから。Barnes は二項述語については述べていないので(46)については説明できないが、それでも三項述語構文から類推すると lui と ce bonhomme は have relation を満足していなければならない筈であるが、それは不可能である。また、(17)、(18)についても問題がある。

(17) Ce jouet lui appartient. (lui=Paul)

(18) Ce livre *lui/*y est. (lui, y=Paul)

我々は(18)に対して(19)のような意味構造を仮定したのだから Barnes 流に考えると [Paul have ce jouet/ce livre] のような have relation を設定できない理由はない。ところが Paul を lui で受けることはできない。もちろん(18)に対して1節で我々が用いた説明を使うことは可能であるが、être に対して have を設定するのは直感に反していると言わざるを得ない。

次に Herslund (1988)に移ろう。Herslund は三項述語、二項述語に対して各々次の様な prédication primaire, prédication secondaire を設定している。



prédication primaire は三項述語では NP₁ と VP 全体、二項述語では NP₁ と V との間で結ばれ、述語として [CAUSER] が用いられる。prédication secondaire は三項述語では NP₂ と NP₃、二項述語では NP₁ と NP₃ との間に結ばれ、述語として基本的には [AVOIR] と [ETRE] が用いられる。そして、prédication secondaire は何らかの動き(axe temporel, axe spatial, axe relationnel)を表すとされている。基本的な考え方は Barnes(1980)と同じで、prédication secondaire の述語として [AVOIR] が適切なときは、つまり [NP₃ AVOIR NP₂] となる時は lui が用いられ、[ETRE] が適切なとき、つまり [NP₂ ETRE à NP₃] となる時は y または à lui が用いられる。[AVOIR], [ETRE] の選択はやはり Barnes と同様、NP₂ と NP₃ のテーマ性(thématicité)の差を基にする。即ち、テーマ性が NP₃ > NP₂ の時は [AVOIR], NP₂ > NP₃ の時は [ETRE] になる。代表的な例をあげてみよう。

(69) a. J'ai laissé mon vélo à Marie. (H)

b. Je lui ai laissé mon vélo. (H)

(70) a. J'ai laissé mon vélo à la gare. (H)

b. J'y ai laissé mon vélo. (H)

(69), (70) にはそれぞれの次の様な prédication secondaire が設定される。

(71) [Marie AVOIR mon vélo]

(72) [mon vélo ETRE à la gare]

これは Marie が mon vélo を「持つ」ことは自然であるが、la gare が mon vélo を「持つ」ことは「不自然」であるからである。この Herslund の考え方は、二項述語が射程に入っていること、(18)の être à の構文が説明できること、(41)のような例は [NEG] という要素を導入にし [le poulet NEG AVOIR les plumes] と考えることができること、など、優れた点が多く大変興味深い研究である。しかしながらやはり問題がないわけではない。第一の問題は prédication primaire の述語である [CAUSER] である。確かに他動詞には使役の意味を語彙的意味として持っているものが多いが、そうでないものも多数存在する。そのため [CAUSER] 以外の述語を設定することが必要になってくる。例えば次の(73), (74)に対して Herslund は(75), (76)の

ような構造を与えている。

(73) Je lui ai conseillé de dire la vérité. (H)

(74) Je lui croyais plus de talent. (H)

(75) Je CAUSER_{intente} [lui AVOIR de dire la vérité]

(76) Je CROIRE [lui AVOIR plus de talent]

さらに prédication secondaire の述語にも [AVOIR], [ETRE] 以外のものをも設定している。

(77) Beethoven, je lui préfère Mozart. (H)

(78) Je CAUSER [lui PRE-CEDER Mozart]

このことは[CAUSER], [AVOIR], [ETRE] だけでは多数にのぼる事例を説明し切れない、ということを示している。さらに、藤村(1989)も指摘しているように、[NP₃ AVOIR NP₂]という関係を満たしているにもかかわらず lui で受けられないものも存在する。(次例)

(79) Il reçoit cette lettre de Pierre. (藤村(1989))

Barnes (1980)も Herslund (1988)も議論の中心は have 若しくは AVOIR の「主語らしさ」あるいは「主語の自然さ」を明らかにすることであった。しかしここで重要なことは、この have または AVOIR はいわばメタ言語に属する概念であるということである。従って、その「主語」も、そして「主語」と「述語」との関係もメタ言語のレベルで議論せねばならない。ところが両者とも、NP₃と have または AVOIR との関係は自然言語若しくは対象言語のレベルで議論されている。メタ言語での「自然さ」と自然言語での「自然さ」は当然異なったものになる筈である。この点がいわばパラフレーズ方式の限界であり、最大の問題点なのではないだろうか。

5. NP₁とNP₂/NP₃との関係

藤村(1989)は主語の起こす動作が受け手(即ち、NP₃)に与える影響(これを被動性と呼んでいる)の強弱に注目し、次の様な原則を立てている。

(80) NP₁の起こす動作に対して…NP₂の被動性大: lui 以外

NP₃の被動性大: lui

NP₂, NP₃とも小: lui 以外

この研究は、以前から注目されてきた datif と動詞の表す「動き」の意味への関心、Leclère (1978)の vrai datif, 山田(1985)の語彙与格・拡大与格の共通意味構造の延長線上にありながら NP₂と NP₃の被動性の差という独自の観点から分析を行ったという点で優れた研究だと思われる。ただ、(80)を見るだけで、この分析の持つ本質的な限界が明らかになる。それは項の数と「動き」にかかわる面である。(80)はあくまで主語以外の二つの NP の被動性の差を問題にしているのであって、主語以外の NP が一つしかない場合(即ち、二項構文)は対象にならないことになる。従って、二項構文には別の説明が必要になる⁽⁸⁾。そしてそもそも動詞に「動き」がな

い場合は被動性という概念そのものが意味を失う。次の例を見てみよう。

(81) Il pense à elle. (Il *lui/y pense.)

(82) Il lui plaît.

これら二つ penser と plaire が間接目的語に与える被動性の差に帰することは無理である。藤村は次の様に述べている。「a ((81)のこと)は主語の、b ((82)のこと)は与格補語の心理的プロセスが語られている。心理描写は一般に、話者にとって親密度の高い重要な人について行われると考えるべきである。この時、話者はその人を actant と見做していい表す。penser と lui が共起しないのは、話者が行う心理描写の対象である人とその心理の内容との間に重要度の点で大きな差異があるからだと思われる。」(P.76) この「心理描写の対象である人」とは il を指し、「心理の内容」とは elle を指すと思われるが、果して il と elle との間に重要度の差があるのだろうか。仮にあるとして、この重要度は果して同じレベルの重要度なのだろうか。重要度の大小を決める基準は何か、等疑問が次から次に湧いてくる。さらに、やはり被動性が全く考えられない(45)、(46)のような例についての藤村の説明は総称名詞と不特定名詞に対する誤解に基づいていると思われる⁽⁹⁾。被動性の概念に基づく説明はかなりの部分をカバーできると思われるが、やはりこれだけでは不十分であると言わざるを得ない。

6. ま と め

以上、個々のレベルについて考察してきたが、ここでは今までの知見を総合的に考えてみたい。今まで出してきた例は「原則」に合わないものが多く、様々な要因が錯綜して、てんでバラバラという印象を与えるが、ここで「原則」—我々はむしろプロトタイプと考えたいが—をもう一度考えてみよう。今までの観察、議論から、いくつかの特に目立つ（即ち、重要な）要因を取り出すことができる。(i)動詞については個々の語彙的特性ではなく、動きを表すか否かという点が重要である。(ii)前置詞及び前置詞句については、場所を表すのか動きの到達点または起点を表すのか、がポイントになる。(iii)前置詞句の名詞については、伝統的な [±HUMAN] はもちろん重要な要因であることには変わらない。それに加えて [±SPECIFIC] が重要であることを見た。それから、名詞の持つ情報量も考慮に入れねばならない。もう一つ注意せねばならないのは lui と y の読み違いである。最大の違いは、lui は個の読み、y は不定詞や文全体に対応する読みがなされることである。両方とも個として読まれる場合は lui は行為を受ける内容、y は単なる場所として解釈される。これは伝統的な datif, locatif に対応している。(iv)直接目的語名詞(NP₂)とà NP₃ (二項述語では主語名詞: NP₁ と NP₃) については、NP₃ AVOIR/have NP₂ /NP₁ になるかが重要であるという説を紹介したが⁽¹⁰⁾、4節で述べたように、例えば、(69)、(70)にそれぞれ(71)、(72)のような prédication secondaire を与える議論はレベルの混同という誤りをおかしていると思う。(69)、(70)にはそれぞれ [mon vélo ETRE à Marie], [mon vélo ETRE à la gare] という意味構造を与えるべきで、[Marie AVOIR mon vélo] が自然で

[la gare AVOIR mon vélo] が不自然であるというのはあくまで自然言語若しくは対象言語のレベルでの話である。後に述べるように筆者は動詞の意味と名詞の指示対象確定の度合いの観点から(69), (79)(そして注(11)の2文)の違いを説明するつもりである。(v)主語名詞と他の名詞との関係については主語名詞の起こす動作に対する被動性という形での提案があった。この提案ではNP₂とNP₃の被動性の差が問題にされているが、後ほど我々は行為とその受け手との関係という形で捉え直すことになる。以上の点を考慮してluiとyのプロトタイプを示せば以下のようになる。

(83)	lui	y
(i)	動き	動き／状態
(ii)	到達点／起点	到達点(動きの場合)／場所(状態の場合)
(iii)	[+HUMAN]	[+HUMAN]
	[+SPECIFIC]	[-SPECIFIC]
	déterminé et individuel	catégorie
	distinct entuty	non distinct
	個の読み	命題内容の読み
	内容情報豊富	
	個(行為の内容)	個(行為の場所)
(iv)	(have relationあり	have relationなし)
	(NP ₃ AVOIR NP ₂	NP ₂ ETRE à NP ₃)
(v)	NP ₃ 被動性大	NP ₂ 被動性大
		NP ₂ , NP ₃ 共被動性小

これらの特徴の複合体でlui/yの分布のかなりの部分を説明できると思われるが、これに合わないものも数多く存在することは今まで見てきた通りである。そこで、これらの諸特徴を基に視点を变えて、今までに出てきた具体例を再検討してみよう。取り上げる例文は(1, 2, 3, 4, 8, 9, 12, 16, 17, 23, 31, 32, 33, 34, 37, 38, 39, 40, 41, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 69, 70, 73, 74, 75, 81, 82)である。まず、動詞の意味に基づいて、各文を、動き表す場合と動きを表さない場合、即ち状態を表す場合の二つに大別する。そしてその各々さらに具体的／抽象的の二つに分けると((42)の表参照)、A類：具体的動き、B類：抽象的動き、C類：抽象的状态、D類：具体的状态、の四つの類ができる。

まずA類からみていこう。以下に例文番号、動詞、先行詞の[±HUMAN], [±SPECIFIC], lui/yの情報、lui/yの別、そして動きを表すのだからNP₃の被動性(動き・行為によって変形したり内容が変わったり大きな影響を受ける、[DATIVE]というよりむしろ[PATIENT]に近い意味役割割りを持つものを「大」とし、そうでないものを「小」とする)を一覧表の形で示す。

(84)

2	faire des trous	les chaussettes	[+SPEC, -HUM]	lui	大
31	pénétrer	ce golf	[+SPEC, -HUM]	y	小
33	donner	Marie	[+SPEC, +HUM]	lui	大
38	voler	Jean	[+SPEC, +HUM]	lui	大
40	tirer de l' eau	le puits	[+SPEC, -HUM]	y	小
41	arracher	le poulet	[+SPEC, -HUM]	lui	大
53	échapper	le fauteuil roulant	[+SPEC, -HUM]	y	小
57	donner	cette porte	[+SPEC, -HUM]	lui	大
59	ajouter	le portrait	[+SPEC, -HUM]	lui/y	
61	imprimer	ce visage	[+SPEC, -HUM]	lui/y	
63	il faut(ajouter)*	une belle peinture	[+SPEC, -HUM]	lui/y	
70	laisser	la gare	[+SPEC, -HUM]	y	小

(※意味的には(59)と全く同じである)

この表を見るとA類ではNP₃の被動性が最も重要な要因であることは明らかである。(59)ではlui/y両方可能であるが、luiの方は絵の内容に修正が加えられることを意味しているが、yの方は修正が行なわれる場所を表しているにすぎないので、被動性はlui:大、y:小、少なくともlui>yとなる。(61)、(63)も同様に考えることができる。これは藤村(1989)の提案した「被動性がNP₃>NP₂の時はlui」とほぼ同じ結果である。但し全く同じという訳ではない。というのは、例えば、(41)でNP₂(les plumes)とNP₃(le poulet)のどちらかが被動性が大きいかわからないのはなかなか決定しがたい問題だからである。A類のうちNP₃が場所を表さない用法がdatifとしてのluiの本来の用法である。

次はD類(具体的状態)を見よう(動きはないので被動性は無意味)。

(85)

23	se poser	le plafond	[+SPEC, -HUM]	y
31	être calme	ce golf	[+SPEC, -HUM]	y

(31)は形容詞構文だが、便宜上ここに含める。それにしても数が少ないが、実例では沢山出てくる。これは、具体的な場所での具体的な状態を表すのでバリエーションが少ないことに由来すると思われる。そして具体的場所というのが動詞の動き・状態にかかわらず“pronom adverbial”としてのyの本来の用法であった。従ってD類では常にyが用いられる。そういう意味では、他のyの用法は歴史的には派生的と考えられる。

問題が多いのはB類とC類である。B類から見てみよう。(指示対象確率の度合いを、大:[+SPEC, +HUM]中:[+SPEC, -HUM]または[-SPEC, +HUM],小:[-SPEC, -HUM]の様に記した。また、抽象的ながら動きがあるので、受け手の状態に変

化が起こる場合に☆印を付けた。)

(86)

16	répondre	(Marie)	大 [+SPEC, +HUM]	lui
		(une lettre)	中 [+SPEC, -HUM]	y
34	donner	la maison	中 [+SPEC, -HUM]	lui ☆
37	mettre	cette entreprise	中 [+SPEC, -HUM]	y
39	arracher	Marie	大 [+SPEC, +HUM]	lui ☆
47	faire connaître	quelqu'un	中 [-SPEC, +HUM]	lui ☆
48	donner	quelque chose	小 [-SPEC, -HUM]	lui ☆
50	consacrer	les femmes	中 [-SPEC, +HUM]	lui
51	donner	l'amour	小 [-SPEC, -HUM]	lui ☆
52	ramener	l'homme	中 [-SPEC, -HUM]	y
54	consacrer	un texte immobile	中 [+SPEC, -HUM]	lui
55	comparer	le malheur public	中 [+SPEC, -HUM]	lui
58	donner	la porte	中 [+SPEC, -HUM]	lui/y
60	destiner	une entreprise	中 [+SPEC, -HUM]	lui/y
64	consacrer	une petite maison	小 [-SPEC, -HUM]	y
65	destiner	cette entreprise	中 [+SPEC, -HUM]	y
66	destiner	cette entreprise	大 [+SPEC, -HUM]*	lui/y
69	laisser	Marie	大 [+SPEC, +HUM]	lui
73	conseiller	(Paul)	大 [+SPEC, +HUM]	lui

(※名詞の持つ情報量が多くなったため [+SPEC, -HUM] でも大になる。)

この表からわかるのは、まず被動性が感じられるものは lui になるということ、次に、被動性が感じられなくても指示対象確立の度合いが大きいものほど lui が用いられやすいということ、そして指示対象確率の度合いが中のもので [+SPEC] のものは lui になる傾向があるということ、つまり、指示対象確立の要因としては [±HUMAN] よりも [±SPECIFIC] の方がより重要だということ、である。ところで指示対象の確立とはろテーマ性に他ならないので⁽¹¹⁾、このB類では、まず被動性、次にテーマ性が重要な要因ということになる。もちろん、これに合わないケースもあるが (例えば (37), (65) など。それから (50), (51), (52) などの総称名詞の扱いも問題がある)、全ての例を一つ洩らさず説明し切るのは至難の技であろう。被動性、テーマ性とも連続体である以上、境界線上ではっきりしないものも、他のレベルの要因がからんでいてそれが見えにくいこともあるだろうからである。

最後にC類に移ろう。これは抽象的状态なので動きはない。B類と同じようにテーマ性到大・中・小の区別をした。

(87)

1	ressembler	l'amour	中	[+SPEC, -HUM]*	lui
3	se fier	un homme équivoque	大	[+SPEC, -HUM]	y
4	penser	ton lieutenant	大	[+SPEC, +HUM]	y
S 9	penser	先行文全体	小	[-SPEC, -HUM]	y
12	penser	先行文全体	小	[-SPEC, -HUM]	y
17	appartenir	Paul	大	[+SPEC, +HUM]	lui
32	penser	ton avenir	小	[-SPEC, -HUM]	y
43	ressembler	un chat	小	[-SPEC, -HUM]	y
44	ressembler	ce chat	中	[+SPEC, -HUM]	lui
45	ressembler	un perroquet	小	[-SPEC, -HUM]	y
46	ressembler	mon perroquet	中	[+SPEC, -HUM]	lui
49	ressembler	une reine	中	[-SPEC, +HUM]	y
62	il faut	une belle peinture	中	[+SPEC, -HUM]	lui
74	croire	(Jean)	大	[+SPEC, +HUM]	lui
75	préférer	Beethoven	大	[+SPEC, +HUM]	lui

(※全体の文意から、話者はある具体的なイメージを抱いていると思われるので [+SPEC] とした。) B類と同様、テーマ性の大きいもの、「中」でも [+SPECIFIC] なものは lui で受けられ、それ以外は y で受けられる。ここでは被動性が全く感じられないので、専らテーマ性が重要な要因として働く。問題は(3)と(4)であるが、前にも述べたように penser は専ら y と一緒に用いられるため、完全に語彙的特徴になっているとも考えられる⁽¹²⁾。se fier の例は今のところわからない。

最後に(81)、(82)であるが、(82)は抽象的状态であるから C類に分類される。そして藤村(1989)の言うように、これは心理プロセスを表すものであり、従って話者にとって親密度の高い重要な人について行われる。即ち、plaie の à NP は [+SPEC, +HUM] でありテーマ性大である。よって lui が用いられる、と説明できる。(81)については penser の語彙的特性によるいまのところは考えざるをえない。

以上、A類は被動性、B類は被動性とテーマ性、C類はテーマ性が重要な要因として働いていることをみた。D類は具体的状態であるから à NP はほとんどの場合具体的場所を表すことになる。ということは常に [+SPECIFIC, -HUMAN] であるから、B、C類のテーマ性と矛盾することになる。これはどう説明すればよいのだろうか。これは、y が抽象の世界で言語的道具として用いられる際、本来、動作の具体的受け手([+SPECIFIC, ±HUMAN])を表す lui と競合して、lui が [+SPECIFIC] の特性を保ち、y が [-SPECIFIC] に転じたためだと考えられる(従って lui の方が y よりもテーマ性が高くなる)。なぜこのような差がでたのかという

と、(14)で見た lui と y の語彙的情報内容の差が大きな原因になっていると思われる。つまり、y は lui よりもカバーする範囲が広いのである。以上のことを図式的に表せば次の様になろう。

(88) 具体的受け手	抽象的		具体的場所
lui	lui	y	y
[+SPECIFIC]	[+SPECIFIC]	[−SPECIFIC]	← [+SPECIFIC]
[±HUMAN]	[±HUMAN]	[±HUMAN]	← [−HUMAN]

動詞構文の特徴をずっと見てきたが、上にあげた例文は議論の性格上やや特殊なものが多かった
ので、この稿の締めくくりとして実際の作品からの用例を、ごく少しであるが、見てみよう。材
料として Jules VERNE の “L'île mystérieuse” の第3部第1章 (P.595~P.609)を用いる。
もちろん、実例の採集には、分体やジャンルにかたよりがないようにせねばならないのだが、こ
こでは単なる例示として受け取ってほしい。

(89) Toutefois, il était certain que l'île, dominée par le mont Franklin, n'avait pu
échapper aux regards des vigies du navire. Mais pourquoi ce bâtiment y
atterrirait-il ? (P.597)

これは具体的な動作を表すのでA類に分類される。島は上陸という動作によって大きな変革を被
るわけではないので被動性は小である。よって y が用いられる。

(90) Le Duncan, on ne l'a pas oublié, c'était le yacht de Lord Glenarvan, qui avait
abandonné Ayrton sur l'îlot et qui devait revenir l'y chercher un jour. (P.597)

(89)と同様具体的な動作で、A類である。この島は搜索という動作の単なる場所を表しているに
過ぎないので被動性は小である。よって y になる。ところで、(89), (90)共被動性は小である
ものの、直観的には(89)の方が(90)より大きく感じるられる。これは à NP が(89)ではいわゆる
間接他動詞の目的語で動作が直接向かうのに対して、(90)では [他動詞+直接目的語] で動作が
完結し、à NP はその動作が行われる場所を表しているだけで、意味的にも統語的にも必須補語
ではない、ということに由来している。今までの議論ではこの点に触れることはなかったが、形
容詞構文の分析の時には触れることがあろう。

(91) «Si c'est le Duncan, dit Harbert, Ayrton le reconnaîtra sans peine, puisqu'il a
navigué à son bord pendant un certain temps.»

—Et s'il le reconnaît, ajouta Pencroff, cela lui fera une fameuse émotion ! (P.598)

これは抽象的な動作でB類に入る。文意から明らかなように Ayrton は大きな心理的変化を受け
るわけだから被動性は大である。従って lui が用いられている。

(92) «Ce que nous ferons, mes amis, ce que nous devons faire, le voici: Nous
communiquerons avec le navire, nous prendrons passage à son bord, et nous
quitterons notre île, après en avoir pris possession au nom des États de l' Union.

Puis, nous y reviendrons avec tous ceux qui... (P.599~P.600)

具体的動作でA類である。(89)同様被動性は小で、y が用いられる。

(93) …Et il n’y aura plus qu’à inscrire l’île Lincoln sur les cartes!

— Mais si on nous la prend pendant notre absence ? fit observer Gédéon Spilett.

— Mille diables ! s’écria le marin, J’y resterai plutôt tout seul pour la garder, …(P.600)

島に残るということは具体的状態だからD類であり、具体的場所を表す y が用いられる。

(94) Vers quatre heures—une heure après qu’il avait été mandé—, Ayrton arrivait à Granite-house. Il entra dans la grande salle, en disant :

《A vos orders. messieurs.》

Cyrus Smith lui tendit la main, ainsi qu’il avait coutume de le faire, … (P.600)

手を差しのべるというのは具体的動作でありA類に属する。問題はこの動作に対して Ayrton の受ける被動性の程度である。手を差しのべられて、それに応じて手を差し出すかそれともプイとそっぽをむくかいずれにせよ Ayrton は何らかの反応を示すことが期待されているという点において(89), (90), (92)に比べて被動性は大大と思われる。被動性の程度はもちろん連続体をなしており、大・小の境界線を引くのは至難の技であるが、きちっとした客観的基準は必要であり、この精密化は今後の課題となる⁽¹³⁾。

(95) 《Ayrton, lui dit-il nous vous avons prié de venir pour un motif grave. …

((94)の続きP.601)

このdire の類の動詞は verbes de communication と呼ばれて Leclère (1978)では verbes datifs の最周辺に位置付けられている。dire は donner と同様、[THEME] の意味役割を持つ名詞のやりとりを表す動詞である。donner と違うのは donner の場合、この名詞は具体物であることが多いのに対して (但し(34)参照)、dire の場合は情報という抽象物である。従って前者はA類 (但し(34)はB類) に分類をされるのも多いが、後者はB類に分類される。à NP のNPは情報を受け取ることによって弱いながらも変化を受けるのでB類においては被動性大と認められる。よってこのグループの動詞は lui を取る。

(96) Ce dernier mot s’échappa comme involontairement des lèvres d’Ayrton, qui laissa tomber sa tête dans ses mains.

Douze ans d’abandon sur un îlot ne lui paraissaient donc pas une expiration suffisante ? (P.601)

動きは全くないのでこれはC類に入る。Ayrton はずっと話の主題であり、[+SPEC, +HUM] だからテーマ性はもちろん大きい。よって lui で受けられる。

(97) Cela dit, Ayrton alla s’asseoir dans un coin de la grande salle et y demeura silencieux. (P. 602)

これはD類であり、y である。

(98) Tous se trouvaient alors dans une disposition d'esprit qui ne leur eût pas permis de continuer leurs travaux. (P.602)

抽象的動作だからB類になる。permettreは許可を与えられる、または与えられない相手に大きな影響を与えるので被動性は大である⁽¹⁴⁾、故にleur(lui)が用いられる。

(99) — Et notre embarcation ? dit Harbert.

— Oh ! répondit Pencroff, elle est abritée dans Port-Ballon, et je défie bien ces gueux-là de l'y trouver! (P.606)

A類で、dans Port-Ballonは単なる場所を表すのでyとなる。

(100) On peut même dire que, à cette distance, il était déjà entré dans la vaste baie, car une ligne droite, tirée du cap Griffie au cap Mandibule, lui restée à l'ouest, sur sa hanche de tribord. (P.607~P.608)

このilはle brickを受けており、une ligne droiteの具体的場所を表している。従ってD類に分類されることになり、yが予測される。ところが実際はluiである。これは何故だろうか。当該文をよく検討してみると、これはいわゆる拡大与格(datif étendu)の例であることがわかる⁽¹⁵⁾。その特徴として、代名詞のかわりにà NPの形にすると許容度が著しく低下することがよく知られている。

(101) *Une ligne droite reste à l'ouest au brick.

従って、この例は他のものと同列に扱うことはできず、例外とはならない。

(102) Les pirates — on pouvait douter que les matelots de ce brick ne fussent tels —, avait-ils donc déjà fréquenté cette île, puisque, en y atterrissant, ils avaient hissé leurs couleurs ? (P.608)

これは(89)と全く同じで問題はない。

以上、13例を詳しく見てきたが、若干の問題はあるものの本質的には我々の分析の正しさが確認できたと思う。

7. 結 論

本稿では動詞構文におけるlui/yの分布を支配している原理を探った。まず動詞構文を構成している要素ごとに特徴を調べ、主な先行研究を検討したが、どれも一長一短であることを見た。そして、それらを総合する形で以下のように、まず動詞の意味に基づいて分析対象を四つのグループに分け、次に各グループごとに最も重要な要因をあげた。

(103) A : 具体的動き、動作、行為 à NPのNPの被動性の大小

B : 抽象的動き、動作、行為 à NPのNPの被動性の大小とNPのテーマ性

C : 抽象的状态 à NPのNPのテーマ性

D : 具体的状态 常にy

最後に名詞の〔±HUMAN〕の特性との関係についてひとこと述べたい。上で検討した Verne の小説から実例13を見てみると全く〔+HUMAN〕:lui, 〔-HUMAN〕:y となっており、一見したところの特性だけで十分なような感じを受ける（だからこそ多くの初級文法の教科書の記述が出てくる）。ところが今まで見てきたようにそれに合わないものも結構あるわけで、それを説明することが本稿のメインテーマになったわけである。そもそも lui/y に限らず、代名詞を用いるためには〔±HUMAN〕にかかわらず、当該名詞が(メンタルスペース風に言えば)話者と聞き手の談話空間に登録されていることが必要である。これがテーマ性の本質で、〔±SPECIFIC〕が〔±HUMAN〕に優先される所以である。ところが人間というのは物に比べて談話空間に登録されやすく（特に固有名詞は初めて導入される以前に話者・聞き手の双方の了解事項になっている場合が多い）、今まで検討した例でも、総称名詞以外は〔+HUMAN〕→〔+SPECIFIC〕の関係になっており（逆は成り立たない）、ここに〔±HUMAN〕が表面に出てくる原因がある。それから、被動性が問題になる場合、特にA類の場合、動作の受け手は人間であることが非常に多く、また、動作の場所や具体的状態の場所は非人間であることが圧倒的に多い、ということも〔±HUMAN〕の表面化に拍車をかける要因になっていると考えられる。

本稿で用いた諸概念の中にはまだ精密化が必要なものや、諸例の中には未だに説明のつかないものも含まれているが、本質的な原則は示せたと確信している。

(注)

- (1) y の場合は à の他に dans, sur などの場所を表す前置詞も可能である。
- (2) この〔+pro〕は代名詞という意味で、GB理論とは関係ない。
- (3) これは〔BE AT〕という意味が、内容的に希薄な、いわゆる機能的意味しか持ち得ないことに原因があると思われる。
- (4) Seelbach (1986)にも前置詞の分類がある。ここでは à を à-datif, à-préposition に分けて、lui/y の分布を次の様に示している。

classe I :N 〔±HUMAN〕 lui
classe II :N 〔-HUMAN〕 y
N 〔+HUMAN〕 à lui

しかし、この分類の重要な基準は lui/y による代名詞化のテストであり、lui/y の区別の説明には利用できない。

- (5) 藤村(1989)は(45), (46), (49)の例を引いて、générique であれば lui でなく y が用いられると述べているが(P.76), un perroquet も une reine も総称名詞ではなく不特定名詞である。また、仮に総称名詞としても、lui で受けられる例があることは(51), (52)から明らかである。
- (6) y のこの特性と、それにかかわる現象については Ruwet (1990)にも述べられている。
- (7) 転位構文については、林(1989, 1990)を参照していただければ幸いである。
- (8) もちろん、藤村(1989)もその点には気付いていて、「一項的」、「二項的」という言葉を使って、二項述語構文を扱おうとしている。しかし少なくとも筆者にとってはこの説明は不十分で、問題を先に延ばしたという感じを強く持つ。
- (9) 注(5)を参考していただきたい。
- (10) NP₁ と NP₂ の関係については本文では扱わなかったが、Herslund (1988)は次の様な例をあげている。
 - (i) Yves est arrivé à Montréal.

- (ii) Cet accident horrible est arrivé à Yves.
これは各々次の様な prédication secondaire を持ち、(i)は y で、(ii)は lui で代名詞化される。
- (i) a. [Yves ETRE à Montréal]
b. Yves y est arrivé. .
- (ii) a. [Yves AVOIR cet accident horrible]
b. Cet accident horrible lui est arrivé.
- (11) テーマ性については Herslund (1988)に thématycité のハイエラキーの記述がある。また、Givón (1976, 1984)も Topicality のハイエラキーを扱っている。また、en による代名詞化にもテーマ性が重要な役割を果たしていることが大木(1990, 1991)で述べられている。他に Popescu-Ramirez et Tasmowski-De Ryck (1988)が thématycité の概念を用いてルーマニア語の所有形の興味深い分析を行なっている。
- (12) もちろん、なぜ penser 等少数の動詞だけが lui/y の区別を語彙的特徴として持つのか、という問題は依然として残る。
- (13) 様々な要因を考慮にいれて被動性、他動性の概念を精密化しようとしたものに Hopper and Thompson (1980)がある。この A～J までの要因をこの tendre の文にあてはめてみると、A：三項述語である。B：動作である。D：一回きりの動作である、E：意図的行為である、F：肯定文である、G：現実の出来事である。H：Agency は高い、J：O は手で highly individuated である、ということになって、他動性は極めて高い。問題になるとすれば、I の O totally affected の頃ぐらいであろう(C の相はの場合関与的ではない)。しかし、frapper, transformer などに比べると、他動性は低く感じられる。
- (14) この例も Hopper and Thompson (1980)のパラメーターではうまく説明できない。つまり、E：意図的行為ではない、F：否定文である。H：Agency が低い、J：O は不定詞で O not-individuated だからである。注(14)も合わせて考えると、文全体の他動性と間接目的語の被動性は分けて考えねばならないと思える。我々が問題にしている被動性という概念は、日本語の受動構文で話題になった affectivity に近い概念である。(久野(1983, 1986)、黒田(1985)参照)
- (15) 拡大与格そのものについての論議は Leclère (1978)、山田(1985)、井口(1990)などを参照していただきたい。

参考文献

- 朝倉季雄(1977)：『フランス文法事典』、白水社
朝倉季雄(1981)：『フランス文法ノート』、白水社
Barnes(1980)：“The notion of ‘Dative’ in linguistic theory and the grammar of French”, *Linguisticae Investigationes*, IV:2
Delaveau et Kerleoux(1985)：Problèmes et exercices de syntaxe française, Armand colin.
藤村逸子(1989)：「代名詞 lui と y、または actant と circonstant について」、『年報・フランス研究』23.
Givón(1976)：“Topic, pronoun, and grammatical agreement”, in Li(ed.) Subject and Topic, Academic Press.
Givón(1984)：Syntax. A Functional-Typological Introduction, vol. 1, J. Benjamins.
Herslund(1988)：Le datif en français, Edition Peeters.
林 和夫(編)(1957)：『フランス語学文庫10, 前置詞・接続詞』、白水社
林 博司(1989)：「フランス語の遊離構文について」、『日本語の文脈依存性に関する理論的・実証的研究』、昭和63年度科学研究費総合研究(A)研究成果報告書
林 博司(1990)：「遊離構文について」、『ことばの饗宴』、くろしお出版
久野 暉(1983)：『新日本文法研究』、大修館
久野 暉(1986)：「受け身文の意味—黒田説の再批判—」、『日本語学』2月号
黒田成幸(1985)：受身についての久野説を改訂する——一つの反批判』、『日本語学』10月号

Leclère(1978) : “Sur une classe de verbes datifs” , Langue française 39.

大木 充(1990) : 「名詞補語 de NP の en 化と他動性」, 『フランス文化の中心と周縁』、大阪外国語大学フランス研究会

大木 充(1991) : 「名詞補語 de NP の en 化その機能と制約」, 『フランス語学研究』25

Pinchon(1972) : Les pronoms adverbiaux EN et Y, Droz.

Popescu-Ramirez et Tasmowsky-De Ryck(1988) : “Thématicité et possessivité en Roumain” ,Lingvisticae Investigationes XIII-2.

Sandfeld(1970) : Syntaxe du français contemporain I : les pronoms, Honoré Champion.

Seelbach(1986) : “A propos d’ un à-datif en français” , Sur le verbe, Press Univ. de Lyon.

田辺貞之助(1970) : 『現代フランス文法』、白水社

山田博志(1985) : 「間接目的語について」, 『フランス語学の諸問題』三修社

Hopper and Thompson(1980) : “Transitivity in Grammar and Discourse” , Lauguage 56.

井口容子(1990) : 「与格の拡大用法と二重主題構文—統語構造と談話構造—」, 『STELLA』第8号、九州大学フランス語フランス文学研究会

(1991. 9. 17 受理)